

新撰和歌夏冬部冒頭の歌について

—しぐれ詠の定位と貫之の意図—

水谷 隆*

(e-mail: mizutani.takashi@nifty.com)

目 次

1. 序 本研究の意義
 2. 新撰和歌における時雨の特異性
 3. 時雨を冬のものとして定位していること
 4. 時雨についての貫之の認識
 5. 時鳥の鳴き始めの時期の定位
 6. まとめ—新撰和歌の性格と編纂の意図
-

1. 序 本研究の意義

醍醐天皇の下命によって作られた古今和歌集は、周知のように、平安以後の日本の文学史上に非常に大きな影響を与え続けた重要な作品である。この古今和歌集の編纂を主導した紀貫之は、その晩年になって、再び醍醐天皇から、古今集より優れた歌を抜き出し、新たな歌集を作るよう命じられた。その歌集の奏上を待たずに天皇はなくなったのであるが、貫之は独りで歌集を完成させた。それが新撰和歌である。従って、同集は、古今集を作り、ひいては日本の和歌史の方向を決定づけた紀貫之個人の、和歌に対する考えや好尚を知るのに、大きな手がかりとなる作品であると言える。また、新撰和歌編纂の態度を明らかにすることで、古今集の理解を深めることにもつながることが大いに期待される。

* 大阪女子短期大学 日本古典文学

しかし、同集の文学史的評価がさほどのものではなかったために、その研究も従来あまり行われては来なかった。そこで、稿者は新撰和歌編纂に際しての紀貫之の態度や思考を明らかにするための研究を続けてきたが、その作業の一環として、本稿では夏冬部の冒頭の歌の配列について考察をしたいと思う。

2. 新撰和歌における時雨の特異性

紀貫之の時代において時雨とは、

季語としては現在は冬に属するが、「万葉集」では晩秋にも初冬にも詠まれ、季節は一定していなかった。「古今集」でも、秋部に三首、冬部に一首あり、このように二季にわたって詠まれる傾向は、「金葉集」の時代あたりまで続く。…中略…初冬の景物として固定されるのは、「古今六帖」「和漢朗詠集」で初冬に採られていることもあるが、「堀川百首」に冬題のひとつとして立てられてからと思われる

(『日本国語大辞典第二版』)

『万葉集』『古今集』共に、秋のものとも冬のものとも定まっていなかったが、平安中期ころから、主に初冬十月の景物として定着した。

(『古典基礎語辞典』)

と辞書類に記載されるように、一般に秋から冬にかけて降るものとして歌に詠まれていた。

念のために勅撰集の四季部に詠まれた時雨の歌を一覧するならば、

古今集 秋下 3 首 冬 1 首
 後撰集 秋中 1 首 秋下 3 首 冬 1 6 首
 拾遺集 秋 2 首 冬 5 首
 後拾遺集 秋下 3 首 冬 4 首
 金葉集 (三奏本) 冬 6 首
 詞華集 秋 1 首 冬 5 首
 千載集 秋下 5 首 冬 1 7 首
 新古今集 秋下 8 首 冬 3 1 首¹⁾

1) 詳細は以下の通り

古今集 秋下 253・260・284 冬 314 後撰集 秋中 297 秋下 351・375・393 冬 443・444・445・447・448・450・451・452・453・454・455・457・459・461・465・469 拾遺集 秋 138・198 冬 215・217・218・219・222 後拾遺集 秋下 342・367・372 冬 380・381・382・383 金葉集 (三奏本) 冬 259・260・262・263・264・265 詞華集 秋 135 冬 143・144・149・150・155 千載集 秋下 353・354・355・368・379 冬 401・402・403・404・405・406・407・408・409・410・411・412・413・414・415・416・417 新古今集 秋下 437・458・525・526・527・53

のように、古今集で時雨の歌は秋部と冬部に配されるが、秋部の方が歌数の多いこと。また、後撰集以後は冬部の歌数の方が増加するものの、金葉集（二度本・初奏本も同じく冬部のみに時雨の歌が見える）を除いて、秋の終わりの時雨の歌もそれぞれの歌集に位置づけられていることが確認できる。

ところが、新撰和歌中の時雨を詠んだ歌はすべて冬部のはじめに配されており、古今集、そして以後の勅撰集のありようとは異なっている。これは、新撰和歌編纂の過程でたまたま秋の時雨の歌が選ばれなかったためなのか、それとも編者紀貫之の意図的な操作の結果なのであろうか。

3. 時雨を冬のものとして定位していること

新撰和歌は、その序文に記すように、古今集から「其勝」を抜き出しつつ編纂されたものである。ではなぜ、古今集に3首見られる秋部の時雨の歌が、新撰和歌の秋部には収められなかったのであろうか。

古今集の四季の部の、時雨を詠んだ歌は、秋部に3首、冬部に1首収められる²⁾。これらのうち、冬部の時雨の歌、

竜田河錦おりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして (古今集冬 314)

は、そのまま新撰和歌の冬部に見える。一方、今問題にしている古今集秋部に収められた時雨の歌、

神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり (古今集秋下 253)

しらつゆも時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり (同 260)

たつた河もみちば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし (同 284)

のうち、260番と284番の歌は、新撰和歌に収められない。ただ、この2首が新撰和歌に選ばれなかった理由は、今はわからない。これらの歌が新撰和歌に取るのには不十分なレベルの作だと見られたのか、それともそれ以外の理由によって排除されたのかが判断できないからである。そして、残る253番の歌は新撰和歌の冬部に収められている。この歌については秋の歌から冬への歌に変えられた理由について、ある程度推測が可能と思われるので、以下にその事について述べる。

古今集253番の歌は、秋部に収められながら、冬十月の異称である「神無月」という言葉を初句に据えていることが、早くから問題にされてきたものである。この問題に関して

7・544・545 冬 560・562・563・567・570・572・573・574・575・576・577・578・579・580・581・582・583・584・585・568・587・588・589・590・595・596・597・598・599・600・621

2) 『新撰和歌』1 4 3 番歌は、国歌大観本に「ほととぎすまつに夜ふけぬこのくれのしぐれにおほみ道や行くらん」とあるが、元禄版本等の「しづくを」でなければ意味が通じない。

は、本稿でも明快な見解を出す用意はない。ただ、このことを保留したままでも、この歌の第 2 句目以下に「時雨もいまだ降らなくに」という言い方をしている以上、時雨の降ることを詠んだ歌（260 番）よりも以前か直後³⁾に置かざるを得ないだろうことは指摘できる。なお、最近の古今集の注釈書では、この歌の初句を「神無月の」のというように考え、「木々を染める十月の時雨もまだ降らないのに」（日本古典集成『古今和歌集』）という解釈をするものが多いようである。そのように理解した場合でも、当該の歌を時雨の降ることを詠んだ 260 番の歌よりも時間をおいた後に置きにくいことは変わらない。秋の時雨であっても、それが木の葉を色づかせることは同じなので、時雨が降り、そのために木々の木の葉が色づいてから時間の経った後に当該の歌を置いたのでは、「かねてうつろふ」ということと矛盾してしまうからである。

このように考えれば、「時雨もいまだ降らなくに」という、古今集 253 番の歌が秋部に置かれるのは、古今集の四季の部では時雨の降り始めるのを秋としているためであるということがわかる。

さて、新撰和歌では、この同じ歌が、冬の部に収められる⁴⁾。今述べたように、時雨の降り始めるのが秋とされているのであれば、当該の歌も、その時雨が降り始める前もしくは、降り始めたころの、秋の歌とされなければならない。けれどもこの歌が冬の部に収められているということはつまり、新撰和歌においては、時雨が冬になってから降るものとして位置づけられているということを意味する。

4. 時雨についての貫之の認識

ではなぜ、古今集四季部で秋から降り始めるとされた時雨を、新撰和歌は初冬の歌に位置づけ直したのか。

- 3) 時雨は「降ったりやんだりする小雨」（日本国語大辞典第二版）であり、あるところでその年初めての時雨が降っても、別の所ではまだ降っていない、という事はごくありふれた自然現象である。したがって、その自然現象のままに、「未だ降らなくに」という歌を、初めての時雨の歌の直後に置くことは可能と考えられる。
- 4) 新撰和歌の諸本の多くは、第四句を「まだきうつろふ」とする。元禄版本などは古今集と同じ「かねてうつろふ」という本文を伝えるが、こちらは、古今集の本文に惹かれて生じた誤写という可能性が高いだろう。同様に第二句も、古今集の「時雨もいまだ」とは異なる「時雨はいまだ」（松平文庫本、内閣文庫本等）の方が新撰和歌の本来の形かと思われる。さて、古今集の歌「神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり」は、（初句の解釈を保留しつつ）秋の歌として、「まだ秋であり、神無月の時雨にしてもまだ降らない＝まだ紅葉の季節でもないのに、前もって色づく神なびの森よ」と一応の理解ができる。一方、新撰和歌の歌「神な月時雨はいまだふらなくにまだきうつろふ神なびのもり」は、「神無月になったとはいえ、木の葉を色づかせる時雨はまだ降らないのに、時雨の降る神無月になったとたんに、早くも色づく神なびの森よ」と、神無月のはじめころの歌として、ふさわしいものと思われる。すなわち、この歌を秋から冬に位置づけ直すに際して、新撰和歌選者である紀貫之が本文を改めたものと考えたい。

ここで、古今集を振り返ってみると、次のような歌があることに気づく。

冬のながうた 凡河内躬恒
 ちはやぶる 神な月とや けさよりは くもりもあへず はつ時雨 紅葉とともに ふるさとの…
 (古今集雑体 1005)

この歌によれば、時雨は神無月になって初めて降るものとされている。

先に見たように、古今集の四季部では、時雨の降り始めるのは秋のこととされていた。一方、このように、冬である神無月になってから「初時雨」が降るとする歌もある。つまり、古今集においては、時雨の降り始めるのは秋であったり、冬であったりするというのである。言い換えると、古今集では、時雨とは、まさに晩秋から初冬にかけて降るものであり、初時雨にしても、それが秋のものとも冬のものとも特定できない、季節の位置づけが曖昧なものだったのである。それを、新撰和歌では、冬に限定しようとした。つまり、曖昧さを排除し、時雨の降る季節を明確に定めようとした、と考えられるのではないか。

実は、右の推定は、貫之個人の作歌における時雨のありようとも符合する。今、貫之集⁵⁾で詠歌年代の確認できる屏風の歌を見るのに、時雨を詠んだ歌が12首確認できる。それらのうち、延喜13年(西暦913年)の

山の紅葉しぐれたる所
 足曳の山かきくらししぐれど紅葉は猶ぞ照りまさりける (貫之集 27)
 および、延喜15年の、

うつろはぬときはの山にふる時は時雨の雨ぞかひなかりける (同 54)

は、詞書から秋の時雨を詠んだものであることがわかるが、延喜19年には

みちすらに時雨にあひぬいとどしくはしあへぬ袖のぬれにけるかな

(同 136 月ごとに一首を詠んだ屏風歌で、9月と11月の歌の間に配されていることから、この歌が10月の詠とわかる。)

と、冬の時雨が詠まれている。そして、延長4年(西暦926年)に詠まれた

女どもの紅葉ひろふ所
 ちるがうへにちりしつもればもみちばをひろふかずこそしぐれなりけれ

(同 185)

は、秋の時雨とおぼしい。つまり、古今集のありようと同様、時雨は秋から冬にかけてふるものと、この時期までの貫之は考えていたものと思われる。

ところが、それ以後、延長5年以後の詠⁶⁾である、

もみちばは照りてみゆれど足曳の山はくもりて時雨こそふれ (同 264)

5) ここでは陽明文庫本を底本とする新編国歌大観三巻所収の本文で示すが、他の本でも同様のことが認められる。

6) 詞書に「京極の権中納言の屏風の料」とあるが、京極権中納言藤原兼輔が権中納言に任ぜられたのは延長5年であることから「この屏風の歌は、延長六七年のことであらう」(萩谷朴(1950)『新訂土佐日記』朝日新聞社、191頁)と判断される。

は、詞書きに「冬」と記す。また、右の歌と年代が前後する可能性はあるが、「延喜の末よりこなた延長七年よりあなた」の詠、

紅のしぐれなればやいそのかみふるたびごとにのべのそむらん (同 316)

も「冬」の歌。また、天慶 2 年（西暦 939 年）の屏風では、「九月」として、時雨の歌を詠むが、

時雨ふる神無月こそ近からし山のおしなべ色付きにけり (同 391)

と、内実は、冬 10 月の時雨を歌っている。そして、同じ屏風の歌として 10 月に、

雨なれどしぐれといへば紅にこのはのしみてちらぬ日はなし (同 392)

ふる時は猶雨なれど神無月時雨ぞ山の色は染めける (同 393)

という 2 首を詠んでいる。次いで天慶 4 年の屏風には、「九月暮るる日」の歌に続けて、

秋さける菊にはあれや神無月時雨ぞ花の色はそめける (同 492)

と、冬 10 月の時雨を詠む。天慶 5 年には、

さとめてぞみるべかりける花薄まねくかたにや秋はいぬらん (同 516)

という歌の次に、

神無月時雨にそめて紅葉ばを錦におれるかみなびの森 (同 517)

と、やはり 10 月の時雨の歌が見られる。また同じ年の月次の屏風でも 10 月の位置に、

もみち葉はてりて見ゆれど神無月しぐれのみふるやまちなりけり (同 533)

とあり、延長年間（西暦 923～931 年）以後の貫之は冬の時雨しか歌に詠まない。これを、偶然と見るよりは、彼が、時雨の詠を冬のものとして考えるようになった結果と見てはどうだろうか。こうした考えに基づき、彼は、新撰和歌において時雨の歌を冬に限定した、と考えるのである。

5. 時鳥の鳴き始めの時期の定位

ここまで、新撰和歌では、古今集で曖昧だった時雨の季節を初冬に限定しようとしたのではないかということを見てきた。そのような貫之の意図的編纂の結果、新撰和歌冬部冒頭に、時雨の「歌群⁷⁾」が形作られることになったと考えるのである。

さて実は、このようにして新撰和歌冬部の冒頭に置かれたと思われる時雨歌群と「相闘」させられた夏部冒頭の、時鳥の歌についても同じような事が言える。以下にそのことを

7) 阪口和子 (1991) 「『新撰和歌』と公任一『拾遺抄』四季部を中心に一」, 『王朝の文学とその系譜』和泉書院, 149 頁

述べたい。

今、取り上げようとする歌、

我がやどの池のふちなみさきにけり山郭公いまやきなかむ (新撰和歌 121)

は、

藤波の咲き行く見ればほととぎす鳴くべき時に近付きにけり (万葉集卷十八 4042)

藤波の茂りは過ぎぬあしひきの山ほととぎすなどか来鳴かぬ (万葉集卷十九 4210)

のように、万葉集に見られる、藤の花の咲く比に時鳥がやってきて鳴く、という発想を踏まえたものである。この歌は、古今集においても夏部の冒頭（135）に据えられているが、結句は諸本ともに「いつか来鳴かむ」とある。この古今集の本文であると、一首は、池のほとりの藤の開花を確認したのち、まだ鳴かぬ時鳥に思いを致し、「いつ来て鳴くのだろうか」と、疑問の表現を用いつつ少しでも早い飛来を待ち望む心を詠んだものということになる。ここであらためて注意しておきたいのは、古今集の歌が「いつか」という疑問の表現を用いていることである。この疑問表現は、時鳥が早く来てほしい、という気持ちを背後に含みながら、しかし実際に時鳥が来るのはいつのことかわからないし、しばらく先である可能性も高いという認識を示している。そして、このような歌が夏部の冒頭に据えられていることによって、古今集において、時鳥の鳴き始めるのは夏になってからのことであるが、それがいつのことかははっきりとしない、ということになっている⁸⁾。

一方、新撰和歌の結句「今や来鳴かむ」は、

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななかむ風のさむさに (古今集物名 432)

のように、今からある事態——山時鳥が池のほとりの藤の花のところにやってきて声を聞かせる——が起きることを、かなりの確実性を持って推測するものである。つまりこの表現の背後には、時鳥は今すぐにも来て鳴くのが通常のありよう、という認識がある。こうした歌が夏部の第一首目に置かれることで、新撰和歌では、時鳥の鳴き始めるのは、夏のはじめからということになっている。つまり、新撰和歌は、夏部冒頭に古今集と同じ歌を置きながら、その結句を変える⁹⁾ことによって、時鳥と季節の関係を変更したのである。

8) このことに関しては既に片桐洋一氏の「『新撰和歌』『人麿集』『古今六帖』は、末句を「いまやきなかむ」としている。続く「五月待つ山郭公～」（一三七）、「五月来ば鳴きもふりなん郭公～」（一三八）、「何時の間に五月来ぬらん葦引の山郭公今ぞ鳴くなる」（一四〇）のように、ほととぎすは四月（引用者注…五月の誤りか）になって来鳴くものであり、夏の始めの四月に「今や来鳴かむ」というのはふさわしくない。この夏部の巻頭にある限りは「何時か来鳴かむ」でなくてはならないのである。」（『古今和歌集全評釈』（上）679頁）という指摘がある。但し、氏が引かれている古今集138番歌「五月こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや」は、五月が来たらそのときには時鳥の声が古びているだろう、ということ、つまり五月になる以前の四月中から時鳥が鳴いていることを前提とした歌である。従って、古今集において時鳥の来鳴くのは五月ではなく、夏になってしばらくしてからのこと、と見るべきであろう。

9) 古今集の歌「わがやどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ」の結句は、

神奈備の磐瀬の社のほととぎす毛無の岡にいつか来鳴かむ (万葉集卷八 1466)

朝霞たなびく野辺にあしひきの山ほととぎすいつか来鳴かむ (万葉集卷十 1940)

では、なぜこのような変更を新撰和歌はしたのであろうか。先ほど「古今集において、時鳥の鳴き始めるのは夏になってからのことであるが、それがいつのことかははっきりとしない」ということを確認したが、たとえば、後撰集においては、夏部の第 2 首目に

卯花のさけるかきねの月きよみいねずきけとやなくほととぎす (後撰集夏 148)

という歌が見え、ほぼ夏の到来と同時に時鳥が鳴き始めていることになっている。また、拾遺集では、夏部の 17 首目になって

春かけてきかむともこそ思ひしか山郭公おそくなくらん (拾遺集夏 95)

と、時鳥がなかなか鳴かぬことを歌い、その後、初声を切望する歌が続いた後、夏部の歌がすべて 58 首あるうちの 22 首目で

髣髴にぞ鳴渡るなる郭公み山をいづるけさのはつ声 (拾遺集夏 100)

と、ようやく初声が聞こえている。このように、古今集以後も時鳥の鳴き始める時期は、歌集により様々であり、そのことはつまり、この当時の和歌表現において時鳥が鳴き始める時期は、孟夏から仲夏という程度の緩やかなものであったということの意味する。そのような状況の中、新撰和歌が夏部の冒頭に時鳥の来鳴くことを当然視するかのとき歌を据えたのは、先に、新撰和歌は時雨の降り始める季節が晩秋から初冬という幅を持ったものだったのを冬の初めという一点に定めたのではないかと推定したことと合わせると、時鳥の場合も時雨と同じく、一般には漠然と考えられているその鳴き始めの時期を、立夏の日¹⁰⁾へと明確に

など、時鳥の飛来を心待ちにする表現として、万葉集に見られる、古くからの表現である。古今集の差注に柿本人麻呂の歌とする伝承が記されることと合わせて、この歌が古今集の時代以前の古い作であったことをうかがわせるものである。そのような古歌を古今集は選んだものと推測される。一方、新撰和歌の結句「今や～ん」という表現は、万葉集には見られず、

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななむ風のさむさに (古今集物名 432)

の他、

雪の内に春はきにけりぐひすのこほれる涙今やとくらむ (古今春上 4 二条后)

あきはぎの花さきにけり高砂のをのへのしかは今やなくらむ (古今秋上 218 藤原敏行)

など、類似したものを含めて、古今集の時代になって詠まれるようになった、まさに当世風の表現であったことがうかがわれる。このことから、当該の歌に関しては、もと「いつか来鳴かむ」とあったものが、古今集の時代ころになって「今や～」と改められた可能性が高い。

そして、当該の歌は、古今集・新撰和歌以外にも、古今和歌六帖(4236)、人麿集(171)にも見え、結句は「今や～」とある(人麿集について言えば、詩歌集大成に収められた書陵部蔵「歌仙集」(511・2)本など「いつか」とするものも見える。)。古今集に「いつか～」とあったものを、新撰和歌が「今や～」に改変し、それを古今和歌六帖や人麿集が収めた、という可能性は、新撰和歌の普及の程度を考えると、あまり考えるべきではないだろう。したがって、稿者は、当該の歌の結句を「変える」ということの内実は、新撰和歌編纂以前に結句を「今や～」とする形の歌が既に存在して、そちらの方を新撰和歌が選択した結果によるものと考えている。

10) 和歌の世界において、時鳥の鳴き始めるのを立夏の日とらえる考え方は、早く万葉集にうかがわれる(「集中の時鳥詠は一五五首。それを通観するに、時鳥は立夏の日に鳴くものとされ、また、卯の花の咲く四月一日になれば鳴くはずと期待されていたけれども、里では実際にはその声を耳にすることはできず、ほとんどの時鳥詠が、声に対する期待、願望、怨恨、または、その佳き声を聞いたとする幻想の歌になっている。」(伊藤博『万葉集積注』巻十七 3909・3910 番歌注)とされる。) 貫之は万

位置づけようとしていたためではないかと想像させられるのである。そしてその想像は、古今集において時鳥の初音を五月と明示する歌、

さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなかむこそこのふるごゑ (古今集夏 137)

いつのまにさ月きぬらむあしひきの山郭公今ぞなくなる (同 140)

が新撰和歌に取られないことによって確かなものとなるだろう。

なお、このような、時鳥の鳴き始めを立夏の日に定めようとする考え方も、時雨の歌と同様、新撰和歌編纂当時の貫之の自作歌に見いだすことができそうである。貫之集に見える時鳥の歌に、鳴き始めの時期がわかるものは多くないが、「延喜御時内裏御屏風のうた」として詠まれた、5月5日の菖蒲を「かざせる」人の姿を題材に詠んだ、

ほととぎす声きしよりあやめぐさかざすさ月としりにしものを (貫之集 228)

では、時鳥の初声を5月の訪れとともに聞いたことになっている。また、延長年間の作と見られる、

さ月くる道もしらねど郭公なく声のみぞしるべなりける (同 256)

と、これと類想の、承平5年(西暦935年)9月の

時鳥きつつこだかく鳴く声は千世のさ月のしるべなりけり (同 320)

も五月の到来と時鳥の鳴き声が同時のものとして詠んでいると思われる。それが、天慶4年3月には

あけくるる月日あれども郭公なくこゑにこそ夏はきにけれ (同 479)

と、夏の到来を告げる時鳥の鳴き声が詠まれる。また、翌天慶5年4月の「内侍の屏風の歌」には、4月の歌として、

夏衣たちてし日より時鳥とくきかんとぞ待ちわたりつる (同 527)

が見られる。おそらくは、時鳥の声を待つ人が描かれていたのであろうが、その人物は立夏の日から時鳥の初音を待っていた、とする。この歌では立夏の日時に時鳥が鳴いたわけではないが、立夏の日から時鳥の声が取りざたされるという点で、承平5年の作以前の歌が、5月に鳴き始めるとする¹¹⁾こととは相違する。やはり、時雨の歌と同様、時鳥について

葉集からこうした考え方を学んだのかもしれないし、あるいは、大伴家持の「霍公鳥者立夏之日来鳴必定」(巻十七 3984 番歌左注)という記述のもととなっただろう漢籍(青木正児氏によって『漢書』楊雄伝の「反離騷」につけられた顔師古の注が指摘されている)の類を知っていて、新撰和歌の編纂に生かしたという可能性もあるだろう。

11)貫之集には延喜年間に詠まれたとおぼしい

延喜御時やまとうたしれる人を召して、昔今の人を歌奉らせ給ひに、承香殿の東なる所にて歌えらせ給ふ、夜の更くるまでとかういふほどに、仁寿殿のものと桜の木に時鳥の鳴くをきこしめして、四月六日の夜なりければめづらしがりをかしがらせ給ひて、めし出でてよませ給ふに奉る

こと夏はいかがなきけん時鳥こよひばかりはあらじとぞさく (貫之集 819)

という歌も見られる。この歌は4月に鳴く時鳥を詠んだものであるが、それを「今宵ばかり」の例外として表現している。つまり、和歌表現上は、時鳥を5月の鳥として認識しているものと判断した。なお当然のことではあるが、時鳥の鳴き始めの時期を、和歌においてどのように定位するかということ、実生

も、初音と立夏と関連づけて詠むことが、新撰和歌の編纂ころの貫之には意識されていたと言えるのではないだろうか。

6. まとめ—新撰和歌の性格と編纂の意図

ここまで、新撰和歌では、古今集においては時期が曖昧だった時鳥の鳴き始めのを立夏の日に描き、あるいは晩秋から初冬にかけて降る物とされていた時雨を初冬に限定したことを見てきた。そのようなことをした編者の意図はどこにあったのか。最後に、新撰和歌夏冬部の冒頭に時鳥と時雨の歌

我がやどの池のふちなみさきにけり山郭公いまやきなむ (新撰和歌 121)

たつた山にしきおりかく神なづきしぐれのあめを立ぬきにして (同 122)

が並置されていることの意味合いを次のように考えてみたい。

以前に私は、新撰和歌の冒頭に礼記月令の記述を踏まえた表現の詠み込まれた春秋の歌が並置されるところに、同集の律令的な性格が読み取れるのではないかということを書いた¹²⁾。そのことを踏まえるならば、古今集で曖昧なところがあった時鳥と時雨の季節を整理し、夏冬部の冒頭に据えるという作為も、同じく新撰和歌の、規範的で調和のとれた世界を志向する律令的な性格を表していると考えられるのではないだろうか。そして、編者貫之はそのような歌集を作り上げることを意図していたのではないだろうか。

活においてどのように認識しているのか、ということは別のものである。

12) 水谷隆 (2000) 「新撰和歌注釈稿 (二)」大阪女子短期大学紀要 25, 大阪女子短期大学, 154 頁にその概略を述べた。また、「新撰和歌における歌の解釈 — 「袖ひちて」歌の場合 —」(韓国日本文化学会 2001 年度春期学術研究発表大会における口頭発表) で詳しい考察を加えた。これに関しては、同大会要旨集を参照されたい。

【参考文献】

- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典第二版』第6巻 小学館、589頁
- 大野晋 (2011) 『古典基礎語辞典』角川学芸出版、584頁
- 奥村恆哉 (1978) 『日本古典集成 古今和歌集』新潮社、103頁
- 萩谷朴 (1950) 『新訂土佐日記』朝日新聞社、191頁
- 阪口和子 (1991) 「『新撰和歌』と公任—『拾遺抄』四季部を中心に—」、『王朝の文学とその系譜』和泉書院、149頁
- 片桐洋一 (1998) 『古今和歌集全評釈』講談社、677頁
- 伊藤博 (1998) 『万葉集釈注』九 集英社、79頁

要 旨

紀貫之の時代において一般に時雨とは、秋から冬にかけて降る物として歌に詠まれていたが、新撰和歌ではみな冬部のはじめに配されている。新撰和歌中の時雨を詠んだ歌の中には古今集で秋部に配されていたものがあることから、これは编者である紀貫之の意図的な操作によるものと思われる。では、それはどのような意図なのか。

ここで貫之自身が時雨を詠んだ歌を見てみると、古今集編纂の頃の作には秋のものとして詠んだ例が確認できるのであるが、延長年間以後の作は、すべて冬の歌として時雨を詠んでいる。すなわち、貫之は晩年に至って時雨とは冬に降るものとして歌に詠む、という考えを抱くようになったものと見られる。その考えが新撰和歌の編纂時にも適用されたのであろう。

また、同様のことが新撰和歌夏冬部の冒頭で時雨の歌と対にされている時鳥の歌についても言える。古今集においては、時鳥の鳴き始めの時期は截然としていない。それを新撰和歌では、立夏の日に鳴き始めるものとして定位しているようなのである。このことも、貫之自身が時鳥を詠んだ歌を見れば、偶然の結果ではなく、新撰和歌編纂時の彼の意図的な操作によるものと考えられる。

貫之がこのような、古今集で曖昧なところがあった時雨と時鳥の季節を整理し、夏冬部の冒頭に据えたのは、彼が、規範的で調和の取れた世界を志向する律令的な性格を表すものとして、新撰和歌を作り上げようとしていたことを意味するのではないだろうか。

Key Words : 初時雨、時鳥の飛来、古今集からの改変、新撰和歌、
夏冬部冒頭の歌、律令的性格、晩年の紀貫之

투 고 : 2014. 5. 31
1차 심사 : 2014. 6. 14
2차 심사 : 2014. 7. 5